

## 編集委員会便り

'95年新春の阪神・淡路大震災に続いての、'96年夏の細菌性病原菌O（オー）157による集団食中毒事件は、関西在住のものにとっては、なにかしら世紀末を感じさせる事柄であり、'97はどんな年に、そして来るべき21世紀はどうなるのだろうかと考えさせられるこの頃である。

O（オー）157の流行は、一説によれば、人間という生体と細菌のバランスがくるってきていることにも一因があるともいわれている。自らが一個の生物であるにも係わらず、自然界の支配者のように他の生物を制御できるという思想の延長として、抗生物質の乱用により耐性菌が出現させ、又、乱開発によって生態系を破壊しているという警告は最近よく耳にする言葉である。

ひるがえって、エネルギー・資源の問題を考えると、人類はあまりにも一方的にエネルギー・資源を食いつぶして高度な産業文明を享受してはいないだろうかと考えさせられてしまう。この点についての新しいパラダイムが待たれるところである。

さて、本題に戻るとして、本号は、環境にもやさしく、エネルギー・資源の高効率利用が図れることから急速に実用化が進んできているガスタービン・コンバインドプラントを「特集」している。

高温排ガスを有効にカスケード利用できるガスタービンを基軸としたコンバインドプラントの特徴や意義を平田先生に解説して頂くとともに、本格的に我が国

に導入され運転が開始されてから既に10年が経過したコンバインドサイクル発電、およびその中心機器であるガスタービンの最近の技術開発状況についても、それぞれの専門家に解説していただいた。ガスタービンコンバインドサイクルは、現在1300℃級ガスタービンを用いた改良型コンバインドサイクル（Advanced Combined Cycle：ACC）の時代に入っている。

また、産業用や民生用として用いられる各種ガスタービン・コジェネレーションの適用事例、運用実績等を紹介すると共に、今後の動向についても解説して頂いた。

更に、将来の新しい展開のために開発が進められている石炭ガス化複合発電や、超高温水素ガスタービンならびに、セラミックガスタービンの動向についても特集に加えることが出来た。

編集委員としては、ガスタービン・コンバインドプラントの最近の状況を把握していただくために非常に有意義な特集になったのではないかと考えている次第であります。

最後になりましたが、ご多忙中にもかかわらず、快く時間を割いていただいた執筆者の方々に深く感謝致します。

森 建 二

（川崎重工業(株)明石技術研究所企画部長）

藤 本 哲 郎

（三菱重工業(株)高砂研究所燃焼・伝熱研究室室長）